祈りの交わり

テサロニケⅡ3章1～5節
2023年10月29日
松田 基子 師

キリスト教の歴史に於いて、イエス・キリストの福音を、ユダヤ一国のユダヤ教から、世界のキリスト教に変換させて行ったのはパウロです。そのパウロを、異邦人の宣教者に呼び出されたのは、天に帰られたイエス・キリストでした。

パウロは、イエス・キリストに出会うまで、神様を信じて、律法を熱心に守っていましたが、
彼自身、神様に出会ってはいませんでした。 彼は律法に照らして、全てを判断しましたが、
生ける神様との交わりは、そこにありませんでした。 立派な祈りの言葉を発する事ができても、神様の御声を聞いた事はありませんでした。 パウロにとって神様とは、全き聖さと、真の正しさを持っておられる近づき得ない、ただただ畏れ多い存在でした。 そんな信仰からは、自分の考えで、
『律法にはこう書いてあるから、神様は
きっとこうなさるのではないだろうか』
と言う、自分の判断が、神様の考えにすり替わっていました。 その結果パウロ自身の判断で、
『キリスト者は神を冒涜している』
と思い込んで、
『自分は正しい事をしている』
つもりで、キリスト者を迫害しました。

キリスト者の後を追って、外国のダマスコへと向かいました。 使徒言行録、9 章によりますと、ダマスコに近付いた時に、突然天からの光りが彼を照らし、パウロは地に倒れ、パウロのアラム語読みである、
**「サウル、サウル、なぜ、わたしを
迫害するのか」**
と言う呼び声を聞いたのです。 パウロにとって、それは今まで経験した事が無い、天からの声でした。

それは、
「お前は一体自分を何者だと
思っているのか」
と問われる、何者でもない自分の間違いを、
主権者として問うて来られた言葉でした。
「なぜ、わたしを迫害するのか。」
パウロは、直感的にそれが天的存在である事が分かりました。 パウロは声の主に向かって
「主よ、（つまり、私の生死存在を握っている
お方。 私はあなたのご意志に従います
との、全面降伏の叫びでした。）」
「主よ、あなたはどなたですか。」
そのお方からの答えは、
**「わたしはあなたが迫害している
イエスである」**
でした。

パウロはそれまで、
『自分は心の底から、神様に従っている』
と思っていました。 しかし、それは神様が望まれる信じ方ではなく、自分の考えに立った、熱心でした。 人間とは隔絶しておられる神様が、
『預言者でもない自分の様な者に
語り掛けられる筈がない』
と思っていたのです。 その為に人間の考えで神様の御心を測り、結果はイエス様が地上に残された、ご自身の体とされた、教会を迫害すると言う大罪を犯していたのです。

パウロは、
**「目が見えなくなり、手を引いて貰って
ダマスコに入り、3日間、目が見えず、**

食べることも飲むこともしなかった」
と記されています。 その間、彼は何をしていたのでしょうか。 それはイエス様への祈りでした。 パウロはそこで初めて、真の祈りを知りました。 それはイエス様との対話であり、イエス様は御心を語り掛けてくださいました。 生ける神様は、生きておられる証明に、祈りを通して対話をして下さるお方です。 イエス・キリストこそ、生ける真の神、真の救い主であることの証明は、祈りによる対話があることです。 イエス様との対話の祈りなくして、生ける信仰は得られません。 その後のパウロは、常に祈り、神様の御心を悟らせて戴いて行動しています。

ガラテヤの信徒への手紙、1章13節から、
「**あなたがたは、わたしがかつてユダヤ教徒として、どのようにふるまっていたかを聞いています。 わたしは、徹底的に神の教会を迫害し、滅ぼそうとしていました。 また、先祖からの伝承を守るのに、人一倍熱心で、同胞の間では同じ年ごろの多くの者よりもユダヤ教に徹しようとしていました。 しかし、わたしを母の胎内に在る時から選び分け、恵によって召して出してくださった神が、御心のままに御子をわたしに示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようにされた時、わたしは、すぐ血肉に相談するような事はせず、また、エルサレムに上って、私より先に使徒として召された人たちのもとに行く事もせず、アラビアに退いて、そこから再びダマスコに戻ったのでした**」
と述懐しています。

ここには、パウロが自分の行動を、人間に相談しなかった事が強調されています。 そして、
「**アラビアに退いたのも、それは、イエス様との祈りのためであり、パウロは全ての決断を、イエス様との祈りによって行った**」
と言っています。 パウロにとって、イエス様との祈りが、その後の人生の原動力であり、全てでした。 真の祈りは、この様に神なるお方と、人間との信頼を土台とした対話です。 しかし、それは本来、全き聖であられ、真に正しい神様に叛いた罪人の人間に許されるものではありませんでした。 それでも、神様は人間を憐れんで、民の代表に祭司を立てさせ、祭司による祈りを許されました。

しかし、人間にその資格が無いことを、人間自身が自覚する為に、年に一度、大祭司は自分と民全体の罪の赦しを求めて、人間の命の代わりに動物犠牲の血を携えて至聖所に入り、罪の贖いの儀式をするように命じられました。 しかし、動物の血をどれ程注ごうとも、人間の罪が赦される筈がありません。 神様はその解決の為に、全く罪の無い神の御子を人類の贖いの為に、人の子として、この世に誕生させられました。 それがイエス様です。

イエス様は愈々人類を贖う為に、十字架に掛かられる前日、神様が下さる新しい約束を教えて下さいました。 それは、ヨハネによる福音書
14章12節から、
「**はっきり言っておく。 わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。 わたしが父のもとに行くからである。 わたしの名によって願うことは、何でもかなえてあげよう。 こうして、父は子によって栄光をお受けになる。 わたしの名によって何かを願うならば、わたしがかなえてあげよう**」
との約束をお与えになりました。

イエス様は、人間が神様に対する叛きの罪の為に断絶していた関係、神様と対話する祈りが出来なかった、その間に入って、罪なき神の御子の体に、全人類の罪を負って、身代わりの十字架に掛

かり、罪の贖いをして下さったのです。 神様は御子イエス様の十字架の贖いを受け入れて、人類の罪を赦し、人間との対話の道を開かれた証明に、イエス様を十字架の死から3日目に、復活させられました。 この後、神様はイエス様の御名による祈りに対話して下さるのです。

そして、そこには更なる祝福が与えられました。パウロは、イエス・キリストを信じる者に対して
ローマの信徒への手紙、8章 15 節で、

「あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。 この霊によってわたしたちは、
『アッバ、父よ』
と呼ぶのです」

と言っています。 子とされたと言う事には、大きな恵があります。 イエス様は、あの、ゲツセマネの園での極限の祈りに於いて、アッバ、即ち子供が父親を信頼して発する『お父さん』と呼び掛けて祈られました。 神様は私たちにも、

「アッバ、父よ」

と呼ぶことを許してくださったのです。

神様は、イエス様を愛する愛で、私達を愛して下さるのです。 全て、イエス様の私達人間に対する愛です。 十字架の尊い犠牲に依って、私達は神様から、対話して頂ける存在、

「天の御父様」

と遠慮なく、何でも祈れる、そして、その全ての祈りを聞いて戴ける者とされたのです。 私達は祈りの最後に、

「イエス・キリストの聖名に依って
祈ります」

と言うのですが、それは軽々しく、祈りを閉じる言葉として言ってはならないのです。 そこには何時も、イエス様の**十字架の苦しみ**と、**愛を噛みしめ**ながら祈らなければ成りません。

また、イエス様は更なる愛を、私達に注いでいて下さいます。 イエス様は永遠の大祭司として、ヘブライ人への手紙、7章25節に、

「この方は常に生きていて、人々のために
執り成しておられるので、御自分を通して
神に近づく人たちを、完全に救うことが
おできになります」

と記されています。 イエス様は今、神の右に座して、私達の祈りと、私達の全存在の為に、執り成し続けて下さっているのです。

パウロはその恵を、最も深く味わい、その祈りに、全生涯を賭けた人です。 パウロはこのイエス・キリストを何としてでも、広く、遠く、一人でも多くの人に伝えずにはいられませんでした。 パウロは紀元49年から、52年にかけて、第二伝道旅行を行っていますが、その間に今朝注目する、テサロニケを訪れ、そこにテサロニケ教会の基礎を築きました。 テサロニケは、マケドニア州の州都で、大きな都市でした。 そこにはユダヤ人の会堂があったのですが、それだけに、パウロ達の伝道は、妨害されました。 しかし、異邦人のユダヤ教改宗者を中心に、キリストの救いを信じる人々が起こされ、彼らはユダヤ教からの妨害、迫害に屈する事なく、イエス・キリストを信じて教会ができたのです。

パウロは彼らに、第1の手紙、5章16節で、

「いつも喜んでいなさい。 絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」

と勧め、彼らは、信仰に於いても、愛の業に於いても、地方教会の模範になりました。
パウロはそんなテサロニケ教会を、第1の手紙、2章19節で、

「わたしたちの主イエスが来られるとき、その御前でいったいあなたがた以外のだれが、わたし

たちの希望、喜び、そして誇るべき冠でしょうか。 実に、あなたがたこそ、わたしたちの誉れであり、喜びなのです」
と言っている程です。

パウロはここで言っている様に、イエス・キリストの十字架の贖いによる救いを、熱心に語ると同時に、イエス・キリストの再臨を語りました。 しかし、パウロの一行が去って後、パウロの言葉を、自分流に解釈して、イエス・キリストの再臨である、
「**主の日が既に来た。**」
その意味は、
「**召された信徒たちは、もう復活したのだ**」
と言う人が出て来たのです。 また、再臨に備えなければと、何もしないで、(働かないで)ただ再臨を待っている人々が現れたのです。 パウロはその事を聞いて、テサロニケの信徒への手紙Ⅱを書き送りました。 その2章2節で、
「**主の日は既に来てしまったかのように言う者がいても、すぐに動揺して、分別を無くしたり、慌てふためいたりしなでほしい**」
と言っています。

彼らには祈りが無かったのです。 神様と対話する祈りが無かったのです。 御言葉は自分勝手に解釈してはならないものです。 大事な事は、常に聖霊を求め、聖霊に助けられて御言葉の真意を尋ね求めて行くことです。 そうする事で、確信が与えられると、他人の言葉に左右される事はありません。 テサロニケ教会はどうして混乱してしまったのでしょうか。 パウロは信仰を全うして行くためには、個人の祈りと共に、
『**祈りの連帯が必須である**』
ことを確信していました。

そこでパウロは、3章1節で、
「**終わりに、兄弟たち、わたしたちのために祈って下さい**」
と祈りの要請をしています。 パウロは父なる神様に、イエス様に、全信頼して、祈りによって、直すら主を愛し、主の御心を求め、主の示しのままに、従ってきました。 彼にとって、祈りが全てでした。 しかし、パウロは、自分がそれ程まで祈っているから、人にまで祈りを頼まなくても良いと言う考えは全くありませんでした。
祈りと言うものは、イエス様の御名、名とは存在を表しますが、イエス様の存在、イエス様の十字架の贖いの上で、 聞き入れられるものです。 イエス様は、パウロのためだけに、死なれたのではありません。 全人類のため、死なれましたが、その救いの入口を、教会に置かれました。
教会はイエス様の体です。 キリスト者は、この体の一つひとつの器官です。 全体が一つになって、体は働きます。 ですから、**教会**は**皆で共に祈る事**に依って、**教会の使命**を**果たしていく事が出来る**のです。 **教会の使命は福音宣教です**。 パウロは主の言葉は、あなた方の所でそうであったように、速やかに述べ伝えられ、崇められる様に祈って下さいと要請しています。

それと言うのも、宣教の妨害は、パウロにも、テサロニケ教会にも、ありました。 互いの具体的な妨害から守られる様にと、祈りの要請をしていますが、パウロには、
「**主は真実な方です。 必ず、あなた方を強め、悪いものから守って下さいます**」
との確信がありました。 それも祈りから来る確信でした。

ところで、パウロは祈りによってもっと、知って欲しいことがありました。 それが5節の、
「**どうか、主が、あなたがたに神の愛とキリストの忍耐とを深く悟らせてくださるように**」
との願いでした。 詳訳聖書には、

「**どうか、主があなたがたの心を、神の愛の実行と証明に導き、また、キリストの再臨を待つ変わらぬ心、忍耐に導いて下さるように**」
と訳されています。 岩波訳でも、脚注に
「**キリスト再臨への忍耐強い待ち望み**」にも解せる、とあります。

キリスト者の希望は、何処にあるべきでしょうか。それは決して、**自分達の安逸ではありません。イエス・キリストが再臨され、真の愛と、平和の神の国が到来すること**です。 その日、一人でも多くに人が救われる様に、伝道に励んでいるのです。主の祈りにも、
「**御国が来ますように**」
と、教えられています。 パウロは、テサロニケ教会の人々と、また、全てのキリスト者と共に、教会が一つになって、キリストの再臨を信じて祈り続けて欲しいのです。 私達も今日、その祈りに召されています。 祈りは父なる神様、イエス様との対話だと言いましたが、その対話を成り立たせて下さるのは、聖霊です。 聖霊の働き助けなくして、人間的考えが強い私達が、神様の御心を悟る事は出来ません。 静まって心を空しくして、
『御聖霊、私の心を支配し、導いて下さい』
と祈り出すことです。

その祈りの継続の中で、
『御言葉が示されたり、主は、生きておられる』
という証が与えられたりします。 **神様は**、私達の思い、願いを越えて、**神様御自身の最善に導かれます**。 私達はどのような願いも心のままに祈ることが許されています。 しかし、忘れてならない事は、
『私達の**究極の望み**は、**キリストの再臨、神の国の到来**です。』
私達は人生の照準を、そこに合わせる時、心の願い、神様に求めるべき祈りも、変わってくる事でしょう。 互いに**祈り合い、励まし合うことなしに信仰の生涯を全うする事は出来ません。**
祈り、祈られ、日曜日毎に共に集まり、主を礼拝し、そのところで、
「**主よ、御国を来たらせ給え**」
と心を一つにして、祈りつつ、共に御国を目指して参りましょう。

お祈りを致します
愛と憐れみに満ちておられる
天の父なる神様

御子、イエス・キリストの十字架の贖いによって私達の罪を赦し、神の子の身分を与え、お父さんと呼ばせて、私達の祈りを聴いて下さる御愛に、心から感謝致します。
また、私達一人ひとりを、キリストの身体なる教会につながらせ、祈りの共同体として下さっている事を感謝致します。
教会が、キリストの再臨を待ち望み、その日まで共に祈り、御心に従って行くことが出来るように、お導きください。
神様の溢れる祝福を、愛するお一人おひとりの上に、豊かにお注ぎ下さい。
尊い救い主、イエス・キリストの聖名によってお祈りを致します。
アーメン。